

“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討

——進路不決断に及ぼす影響の観点から——

萩原俊彦* 櫻井茂男**

本研究の目的は、大学生の職業選択に関連すると考えられる“やりたいこと探し”の動機を明らかにし、その動機の自己決定性と進路不決断との関連を検討することであった。まず、どの程度自己決定的な動機で職業選択に関わる“やりたいこと探し”をしているかを測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。尺度項目の因子分析の結果から、やりたいことを探す動機として、非自己決定的な「他者追随」、自己決定性においては中間的な「社会的安定希求」、自己決定的な「自己充足志向」の3因子が抽出され、尺度の信頼性と妥当性が確認された。作成された“やりたいこと探し”の動機尺度を用いて、“やりたいこと探し”の動機の個人差と進路不決断との関連を検討したところ、“やりたいこと探し”の動機のうち、非自己決定的な動機である「他者追随」が相対的に高い非自己決定的動機群は、進路不決断の面で問題を抱えている可能性が示唆された。本研究で得られた結果は、現代青年のキャリア意識として広く支持されている“やりたいこと”志向と職業選択との関連を検討する上で意義があると考えられる。

キーワード：やりたいこと探し、進路不決断、自己決定理論、職業選択、大学生

問題と目的

平成15年度の国民生活白書（内閣府, 2003）によれば、近年、大学を卒業した正社員の入社後3年内における離職率は3割を超えている。また、フリーターやニートの問題（小杉, 2002, 2004）が指摘され、現在の大学生は職業選択やその後の適応に問題を抱えていると考えられる。

こうした問題の背景には、大学生の就職への取り組みやキャリア意識形成における変化があると考えられる。そうした観点から近年注目されてきたのが、当初、フリーターに特徴的に見られるとされた“やりたいこと”志向である（日本労働研究機構, 2000）。この“やりたいこと”志向は、好きなことや自分のやりたいことを仕事に結びつける傾向として、現代の大学生にも広く支持されていることが明らかになっている（安達, 2004）。

このような志向を持ってやりたいことを探求するのが“やりたいこと探し”であるが、Marcia (1966) のア

イデンティティ・ステイタスに基づけば、この行動は、将来の職業選択に向け傾倒の対象を探索する行動と解釈される。したがって、“やりたいこと”志向を持ち“やりたいこと探し”をすることは、青年期後期特有の課題であり、それに取り組むこと自体が進路不決断に直結する訳ではない（安達, 2004）。その一方で、“やりたいこと”志向が広く支持されているにもかかわらず、一般学生の進路未決定者像の第一として、興味ある選択肢がなかなか見出せないことが明らかにされている（若松, 2001）。また、“やりたいこと”へのこだわりが、自己分析から実際の就職活動への移行困難（大久保, 2002）や、職業の社会的意義・公共性の軽視（下村, 2003）といった不適応的状况をもたらすという報告もあり、大学生の職業選択に対する“やりたいこと”志向の影響は適応・不適応双方の知見が散見される状況にある。

以上のことから、大学生の中には、他の学生と同様に“やりたいこと”志向を支持しながらも、自分が“やりたいこと”を見出せていないことを負い目を感じ「やりたいことを持っていないといけない」という外的な統制（乾, 2001; 久木元, 2003）を感じている者が少なからず存在するのではないかと考えられる。つまり、同じ“やりたいこと”志向を持って“やりたいこと”探しをしていても、その動機には、本人が内発的に「探したい」というものから、周囲の影響によって外発的に「探さなければならない」というものまで、自己決定

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1
hagiwara@human.tsukuba.ac.jp

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系
〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1
ssakurai@human.tsukuba.ac.jp

性のレベルにおける幅があるのではないかと考えられる。

これまで我が国では、職業未決定の背景を探る研究として自我の未確立(松尾・佐野, 1993; 下山, 1986)や自己効力感(浦上, 1993, 1995, 1996)との関連を検討する研究が多くなされてきた。一方、職業の選択においては、仕事場面で何を価値づけ重要視するのかという動機づけの問題もあると考えられている(安達, 2001b)。個人の動機づけ志向である一般因果律志向性(Deci & Ryan, 1985b)と職業探索について検討した Blustein (1988) は、個人が選択した目標や行動に関する内発的な動機と、外的環境からの統制や模範の内在化によってもたらされる動機が、探索活動と活動に対する信念に関連することを見出しており、我が国でも、近年は動機づけとの関連を検討する研究がなされるようになっていく(e.g. 安達, 1998, 2001a, 2001b)。しかし、現在の大学生に広く認知されていると考えられる“やりたいこと探し”が、いかなる動機から行われ、職業選択にどう関連するかを心理学的な視点から検討しているものは見受けられない。“やりたいこと探し”に対する動機における自己決定性の違いを検討することにより、“やりたいこと”志向を自分の志向として受け入れる認知様式の個人差が明らかとなり、また、“やりたいこと”志向が職業選択に与える影響についての議論を整理する一助となることが期待される。

以上のような問題意識から、本研究では、大学生の職業選択と関連すると考えられる“やりたいこと探し”の動機を自己決定性の観点から明らかにし、職業選択における進路意思決定との関連を検討することを目的とした。この検討を行う上で有効と考えられるのが、Deci & Ryan (1985a, 1991), Ryan & Deci (2000) の自己決定理論(Self-Determination theory)である。

自己決定理論(Deci & Ryan, 1985a; Ryan & Deci, 2000)は、動機づけを相対的な自己決定性(自律性)の視点から区分し、従来、二項対立的にみなされてきた外発的動機づけ-内発的動機づけを連続的なものとして捉えることを提唱している。この区分に導入された概念が調整スタイルである。調整スタイルとは、その行動を行わなければならない時、もしくは行いたい時の自分なりの理由づけであり(永作・新井, 2003)、行動を生起する際の自己決定性の低い方から順に外的調整、取り入れ調整、同一化調整、統合調整、内的調整に区分される。外的調整は、随伴する外的な要求や報酬を満たすために行われる調整スタイルである。本人が行動の意思決定をしておらず、最も非自己決定的である。

取り入れ調整は、罰や不安を避けたり、プライドのような自我拡張の感覚を手に入れたりするために行われる調整スタイルである。外的調整と異なるのは、その行動を「しよう」という自己決定が一応はできていることである。しかし、その程度は弱く、消極的理由からである。同一化調整では、行動は自分にとって重要なものとして同一化され、行動理由に対する価値づけの意識が含まれることから、より一層自己決定的である。統合調整では、本人は喜んで行動し、自己調整は自己概念と一致する。同一化調整よりも自己決定性は高いが、あくまで道具的行動であることから、外発的動機づけに区分される。最後に、内的調整は従来の内発的動機づけに相当し、最も自己決定性が高い。自己決定理論に基づけば、これらの調整スタイルはその相対的な自己決定性の順序により、一次元の連続体(自己決定連続体)上に並ぶことになる(Hayamizu, 1997; 永作・新井, 2003; Ryan & Connell, 1989)。

自己決定理論は、特に教育領域において、多くの教育に関する行動や情動、適応状態と関連があることが示されてきたが、近年では、ヘルスケアや精神的健康などを予測できる理論として応用がなされている(e.g., Igreja, Zuroff, Koestner, & Saltaris, 2000; Kasser & Ryan, 1999; Ryan, Plant, & O' Malley, 1995; Ryan, Rigby, & King, 1993; Sheldon & Kasser, 1995; Williams, Grow, Freedman, Ryan, & Deci, 1996)。一方、我が国での自己決定理論に関する研究は教育評価に関するものが多く(e.g. 速水, 1995; Yamauchi & Tanaka 1998)、進路選択や職業選択に関わる動機の自己決定性が適応に及ぼす影響について検証した研究は、永作・新井(2003, 2005)や藤原(2005)を除き、ほとんど見当たらないのが現状である。したがって、職業探索と関わりのある“やりたいこと探し”の動機と適応との関連を、自己決定理論の枠組みで実証的に検討することは心理学的に意義のあることと考えられる。

さて、“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の違いと進路意思決定との間には次のような関連が考えられる。自己決定理論では、より自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連があることが示されている(Ryan & Deci, 2000)。職業探索の動機づけにおける自己決定性の違いが、職業探索行動や精神的健康に与える影響を検討したものとして、Vansteenkiste, Lens, Witte, Witte, & Deci (2004)の研究がある。Vansteenkiste et al. (2004)は、職業を探索する動機の自己決定性に違いがあることを見出し、自律的(自己決定的)な探索動機は、職業探索における楽観主義や、強

い意志、生活への満足感の向上など、ポジティブな結果と関連することを見出した。一方、統制的（非自己決定的）な探索動機は、精神的健康や生活への満足感の低下など、ネガティブな結果と関連することを明らかにした。個人が選択した目標や行動に関する内発的な動機と、外的環境からの統制や模範の内在化によってもたらされる動機が、探索活動と活動に対する信念に関連することを見出した Blustein (1988) の研究と併せて考えれば、“やりたいこと探し”の動機が自己決定的であるほど、進路意思決定への心理的困難は低く、一方、動機が非自己決定的であるほど、進路意思決定への心理的困難は高いと考えられる。

以上から、本研究では“やりたいこと探し”の動機における自己決定性の違いが進路不決断に対してどのように関連するかを検討するため、大学生が“やりたいこと探し”をする動機の自己決定性を測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行うことを第1の目的とする。妥当性検討における仮説は次の通りである。“やりたいこと探し”の動機を測定する尺度が動機の自己決定性を測定しているならば、自己決定感を測定していると考えられる尺度と関連し、非自己決定的な動機とは負の相関が、自己決定的な動機とは正の相関が見られるであろう。

また、本研究では、“やりたいこと探し”の動機の自己決定性における個人差と、進路意思決定への心理的困難の程度を示す進路不決断（清水, 1990）との関連を検討することを第2の目的とする。“やりたいこと”志向の問題（安達, 2004）において議論された、就職活動への移行困難（大久保, 2002）や、職業の社会的意義・公共性の軽視（下村, 2003）を踏まえ、進路不決断の職業決定不安、職業選択葛藤、職業外的統制、職業モラトリアムとの関連を検討する。個人差の検討においては、“やりたいこと探し”の動機の得点パターンがより自己決定的な群は、非自己決定的な群に比べて、進路不決断尺度の各下位尺度得点が低いことが予測される。

方 法

調査対象

首都圏近郊の国立大学法人A大学、都内私立大学B大学、ならびに首都圏近郊の私立大学C大学、計3校の大学生399名を対象とした。学年の内訳は、1年生が231名（男性157名、女性74名）、2年生が97名（男性61名、女性36名）、3年生が50名（男性18名、女性32名）、4年生が7名（男性3名、女性4名）、性別もしくは学年が不明の者は14名であった。所属学科は、文科系191名、

理科系175名、専門職養成系30名、不明3名であった。

調査時期および調査手続き

2004年10月に無記名の個別記入形式の質問紙で、集団式もしくは個別式で実施した。

調査内容

“やりたいこと探し”の動機尺度（原案） 大学生用の“やりたいこと探し”の動機を測定する尺度を作成するため、予め上記の調査対象とは別に、首都圏近郊ならびに九州地方の大学生270名¹に対し、「将来就く仕事を探す上でのやりたいことを、なぜ『探さなければならない』と考えているか²」を回答するよう求め、自由記述を収集した。

収集された自由記述を参考にして“やりたいこと探し”の動機尺度37項目（原案）を作成した。尺度作成の手順としては、まず、発達心理学または臨床心理学専攻の大学院生4名が、収集された回答項目をKJ法により整理した。次に、発達心理学または臨床心理学専攻の大学院生7名が、整理された各項目が外的調整、取り入りの調整、同一化的調整、内的調整³、該当なしのいずれにあたるか評定した。その際、自己決定理論と自己調整スタイルの説明を記した資料を渡し、資料を読んだ上で評定を行うよう依頼した。そして、7名中4名以上の評定が一致した項目を原案とした。最後に、原案を、大学・大学院で自己決定理論および動機づけの心理学を教育・研究している専門家に見せ、項目のチェックを行ってもらった。最終的に、外的調整10項目、取り入りの調整10項目、同一化的調整9項目、内的調整8項目の計37項目が準備された。

なお、今回の調査では“やりたいこと探し”の動機

¹ 予備調査は2004年5月から7月に実施された。調査対象は、前出の国立大学法人A大学、私立大学C大学の他、九州地方の公立大学法人D大学、首都圏近郊の私立大学E大学であった。学年の内訳は、1年生が119名（男性103名、女性16名）、2年生が95名（男性56名、女性39名）、3年生が39名（男性26名、女性13名）、4年生が8名（男性6名、女性2名）、性別もしくは学年が不明の者は9名であった。所属学科は、文科系254名、理科系7名、専門職養成系3名、不明6名であった。

² ここで「探さなければならない」と当為のネガティブな形式で質問しているのは、大学生にとって“やりたいこと探し”が社会的に望ましいものと認知される可能性が高く（安達, 2004; 下村, 2003）、回答が肯定的なものに偏向する可能性があったためである。

³ 内的調整に評定された項目には、統合的調整と考えられるものが含まれていたが、内的調整と統合的調整は多くの部分を共有することから（Ryan & Deci, 2000）、本研究では内的調整に一括して扱うこととした。

を、将来就きたい職業についての“やりたいこと探し”に限定して測定する目的から、「あなたが将来仕事につく上で『やりたいこと』についておうかがいします」という教示を行った。回答形式は「あてはまらない」(1点)～「あてはまる」(5点)までの5件法である。

妥当性検討のための尺度 ①自己決定感尺度：桜井(1993)の自己決定感尺度8項目を用いた。本尺度は、自分自身が行動の起点もしくは出発点であるという知覚(Deci & Ryan, 2002)を測定する尺度である。回答形式は「あてはまらない」(1点)～「あてはまる」(5点)までの5件法である。②自律志向性尺度：Deci & Ryan(1985b)の翻訳版である桜井(1995)の一般因果律志向性尺度のうち、自律志向性の12項目を用いた。自律志向性とは、自分の決定によりある行動を行ったと認知する傾向を表す概念である。回答形式は「全くあてはまらない」(1点)～「よくあてはまる」(4点)までの4件法である。仮説としては、非自己決定的な調整スタイル(外的調整・取り入的調整)に相当する項目を多く含む下位尺度では、自己決定感尺度・自律志向性尺度との間に負の相関関係が示され、自己決定的な調整スタイル(同一化的調整・内的調整)に相当する項目を多く含む下位尺度では、自己決定感尺度・自律志向性尺度との間に正の相関関係が示されると考えられる。なお、質問紙実施に際しては回答時の負担を考慮し、①・②いずれかの尺度に回答してもらうよう、調査対象者をランダムに割り振るようにした。

“やりたいこと探し”の様態を問う項目 将来仕事に就く上での“やりたいこと”に限定して、“やりたいこと”を過去探していたのか、今探しているのか、過去も今も探していないのか、“やりたいこと”が見つかっているか否かについて回答を求めた。

進路不決断尺度(清水, 1990)「進路不決断」とは進路を決定できない状態を表す概念である。本尺度は「将来の職業」の側面について8下位尺度から構成されているが、本研究では、職業決定に関する不安を測定する「職業決定不安」、職業選択に際しての葛藤を測定する「職業選択葛藤」、職業決定が外的要因に統制されていると感じる程度を測定する「職業外的統制」、職業のことを真剣に考えていない程度を測定する「職業モラトリアム」の4下位尺度を用いた。なお、本尺度は中学生を対象に作成された尺度であるが、奥井・大里(2004)は、本尺度の若年労働者への適用が可能であることを検証しており、本尺度の大学生への適用も可能であると考えられる。

結果と考察

“やりたいこと探し”の動機尺度の検討

デモグラフィックデータの記入もれがある者、および、やりたいことを「過去も今も探していない」と答えた者を除いた362名を対象に、“やりたいこと探し”の動機尺度37項目(原案)に対して、因子分析を行った。初期解を主成分分析で求めたところ、スクリープロット法により3因子解が妥当であると判断されたため、因子数を3に固定し主因子法 Promax 回転を実施した。更に、因子負荷量の絶対値が.40以下の項目と多重負荷を示した項目を除き、再度同様の因子分析を行った。その結果、因子負荷量の絶対値.40以上で重複負荷の無いものを基準に、3因子25項目を採用した(Table 1)。

第1因子は「目標があると充実できるから」「やりたいことは生きがいになると思うから」「やりたいことができれば楽しいから」など、尺度原案作成時に内的調整や同一化的調整に評定された項目が多く含まれており、やりたいことがあること、やりたいことを考えること自体が自己の充足感を高めるといふ、自己決定的な動機からやりたいことを探す項目で構成されていたので、内的調整・同一化的調整に相当する「自己充足志向」因子と解釈した。第2因子は「就職しなければならぬから」「そろそろ将来のことを考えなければならぬから」「将来の仕事を決める上で重要だから」など、尺度原案作成時に取り入的調整に評定された項目が多く含まれているが、外的調整や同一化的調整に分類された項目も一部含まれており、将来における自分の社会的立場を確保し安定させるといふ、自己決定の面では中間的な動機からやりたいことを探す項目で構成されていたので、取り入的調整に相当する「社会的安定希求」因子と解釈した。第3因子は「周りの人はやりたいことを考えているから」「周りの人はすでにやりたいことが決まっているから」「身近に就職活動をしている人がいるから」など、尺度原案作成時に外的調整・取り入的調整に評定された項目が含まれており、自分は周りの人に比べて出遅れており、それに追いつけなければならないという非自己決定的な動機からやりたいことを探す項目で構成されていたので、外的調整に相当する「他者追随」因子と解釈した。以上から、Table 1に示した各因子に高い負荷をした項目で「自己充足志向」尺度、「社会的安定希求」尺度、「他者追随」尺度を構成した。

Table 1 “やりたいこと探し”の動機尺度の因子分析結果と各項目の平均値および標準偏差(主因子法・Promax回転, $n=362$)

	因子負荷量			共通性	M	SD
	因子 1	因子 2	因子 3			
第 1 因子：自己充足志向(内的調整・同一化的調整に相当, 12 項目, $\alpha = .85$)						
22. 目標があると充実できるから	.72	.11	-.11	.58	4.18	.92
7. やりたいことは生きがいになると思うから	.67	-.05	-.01	.43	4.41	.82
18. やりたいことができれば楽しいから	.67	-.06	-.02	.42	4.37	.81
28. 打ち込めるものを見つけたいから	.66	.15	.01	.53	4.24	.89
8. やりたいことなら辛いことにも耐えられるから	.64	-.06	.08	.39	3.96	1.03
21. やりたいことをやりたいと思うから	.63	.04	-.26	.46	4.38	.81
15. 可能性を見つけたいから	.52	-.07	.15	.27	3.72	1.11
5. 自分自身を向上させるのに必要だから	.51	.07	.03	.29	3.94	1.07
19. やりたいことを考えるのが楽しいから	.48	-.06	-.05	.22	3.55	1.07
36. 何か目標を定めたいから	.48	.14	.16	.35	3.92	1.01
16. やりたいことがないと毎日がつまらないから	.47	.06	.00	.24	3.86	1.08
32. 自分がどのような人間か知りたいから	.41	-.06	.32	.25	3.24	1.19
第 2 因子：社会的安定希求(取り入れ的調整に相当, 9 項目, $\alpha = .86$)						
17. 就職しなければならないから	-.26	.74	.11	.58	3.58	1.26
26. そろそろ将来のことを考えなければならないから	-.06	.70	.16	.60	4.00	1.10
20. 将来の仕事を決める上で重要だから	.01	.69	-.19	.39	4.07	1.01
9. 生活していくために必要だから	-.01	.69	-.07	.42	4.00	1.02
34. 人生を左右する大切なことだから	.19	.64	-.07	.49	4.12	.98
35. 今探さないと手遅れになってしまうから	-.01	.55	.18	.43	3.40	1.24
24. 探さないと将来, 後悔するから	.11	.54	.04	.37	3.89	1.10
27. 独立して一人前になりたいから	.20	.47	-.01	.32	3.96	1.10
33. 将来に不安を感じるから	-.02	.46	.35	.49	3.66	1.19
第 3 因子：他者追従(外的調整に相当, 4 項目, $\alpha = .77$)						
29. 周りの人はやりたいことを考えているから	.04	-.05	.81	.62	2.73	1.19
13. 周りの人はすでにやりたいことが決まっているから	.08	-.11	.79	.56	2.39	1.19
30. 身近に就職活動をしている人がいるから	.07	-.14	.68	.39	2.24	1.20
31. 今の自分には, やりたいことがないから	-.08	.13	.50	.32	2.75	1.35
因子間相関						
	因子 1	因子 2				
	因子 2	.34				
	因子 3	.02	.49			

a) ゴシック体は因子負荷量.40 以上を表している。

信頼性の検討

各下位尺度の内的一貫性を求めたところ, Cronbach の α 係数は「自己充足志向」が.85, 「社会的安定希求」が.86, 「他者追従」が.77 であった。「他者追従」の α 係数はあまり高いとはいえないが, 一応の内的一貫性が保証された。

併存的妥当性の検討

次に, 尺度の併存的妥当性を検討するため, “やりた

いこと探し”の動機尺度の各下位尺度と自己決定感尺度・自律志向性尺度との相関を求めた (Table 2)。その結果, 自己決定感尺度との間では, 自己決定性が低い外的調整に相当する「他者追従」で弱い負の相関 ($r=-.22$) が, やや自己決定的ではない取り入れ的調整に相当する「社会的安定希求」では無相関が, 自己決定性の高い内的・同一化的調整に相当する「自己充足志向」では弱い正の相関傾向 ($r=.14$) が見られた。また, 自

Table 2 “やりたいこと探し”の動機尺度と自己決定感・自律志向性との相関

	自己決定感 ($n=183$)	自律志向性 ($n=157$)
他者追従	-.22**	-.18*
社会的安定希求	-.09	.24**
自己充足志向	.14 ⁺	.43***

* $p<.10$ ** $p<.05$ *** $p<.001$

律志向性尺度との間では、「他者追随」では弱い負の相関 ($r=-.18$) が、「社会的安定希求」では弱い正の相関 ($r=.24$) が、「自己充足志向」では中程度の正の相関 ($r=.43$) が見られた。

以上のことから、“やりたいこと探し”の動機尺度の各下位尺度は、それぞれ自己決定性の面で異なる調整スタイルに相当する動機を測定していることが統計的に示唆され、併存的妥当性がほぼ確認されたと考えられる。なお、自己決定性の程度としては高いとはいえない取り入的調整に相当する「社会的安定希求」と自律志向性尺度との間に正の相関が見られたが、自律志向性尺度の項目が具体的な社会的場面における自律志向性を問う形式であったことが、この要因として考えられる。社会的場面での自律志向性を発揮するには、「社会的安定希求」の項目が表象するような自己の社会的立場の確保と安定、すなわち、経済的な意味での「自立」も必要であるという考えが、調査対象者の間に存在したのではないかと考えられる。「社会的安定希求」と自律志向性尺度との相関は正の相関とはいえず、弱い相関であり、上記の点を考慮すると、本研究での結果はほぼ妥当なものであると考えられる。

構成概念妥当性の検討

先行研究 (Hayamizu, 1997 ; 永作・新井, 2003 ; Ryan & Connell, 1989) では、動機づけの下位概念である調整スタイルは、自己決定の程度により一次元上に連続体として並べることができるかとされている。これを検証する方法として、先行研究では、調整スタイルを測定する各下位尺度間の単相関を元に、概念上隣接する調整スタイル同士は関係性が強く、概念上離れたもの同士では関係性が弱くなることを実証し、その論拠としている。そこで、構成概念妥当性の検討として“やりたいこと探し”の動機尺度の下位尺度間の関係を検討するため、下位尺度間相関を求めた (Table 3)。その結果、調整スタイルの概念上隣接すると考えられる「他者追随」と「社会的安定希求」との間に中程度の正の相関が示され ($r=.43$)、同様に調整スタイルの概念上隣接すると考えられる「社会的安定希求」と「自己充足志向」との間でも、弱い正の相関が示された ($r=.34$)。調整スタイルの概念上離れていると考えられる

「他者追随」と「自己充足志向」との間では、有意な相関は示されなかった ($r=.09$)。以上のことから、“やりたいこと探し”の動機尺度の3つの下位尺度においても、自己決定性の違いによる調整スタイルの一次元性が統計的に示唆され、“やりたいこと探し”の動機尺度の構成概念妥当性が確認された。

以上のように、自己決定理論に基づき、外的調整に相当する「他者追随」、取り入的調整に相当する「社会的安定希求」、内的・同一化的調整に相当する「自己充足志向」の3つの下位尺度からなる“やりたいこと探し”の動機尺度が作成され、その信頼性、併存的妥当性、構成概念妥当性が確認された。本研究で、自己決定性が高くない「他者追随」「社会的安定希求」が“やりたいこと探し”の動機として抽出されたことから、進路選択に悩む大学生の中には、“やりたいこと探し”に関して社会から外的統制を感じている者が存在する可能性があると考えられる。

なお、“やりたいこと探し”の動機尺度における3つの下位尺度の性差は認められなかった。続いて、国立大学法人A大学と、私立大学B・C大学とで下位尺度得点の差を比較したところ、「自己充足志向」を除き、「社会的安定希求」「他者追随」の2つの下位尺度において群間に有意な差が認められた。そこで、これらの群別に変数間の相関係数を算出したところ、Table 2, Table 3に示した相関係数と符号を逆とする有意な相関は認められず、変数間の関係に性別、学校による大きな傾向差はないものと判断した。したがって、続く分析は性別と学校を一括して行うこととした。

“やりたいこと探し”の動機の個人差による、進路不決断状況の検討

① “やりたいこと探し”の動機による分類 次に、調査対象者を“やりたいこと探し”の動機尺度の各下位尺度得点の高低により、複数のパターンに分類し、各パターンにおける進路不決断の差を検討した。まず、“やりたいこと探し”の動機の「自己充足志向」「社会的安定希求」「他者追随」の3下位尺度をz得点に換算した。それらを用いて、記入もれがある者、および、やりたいことを「過去も今も探していない」と答えた者を除いた346名を対象に、クラスタ分析 (平均ユークリッド距離によるWard法) を行った。各クラスタに含まれる調査対象者の数、クラスタの解釈可能性、自己決定理論との整合性などから総合的に判断した結果、3クラスタによる分類が“やりたいこと探し”の動機のパターンを最もよく表していると考えられた。 χ^2 検定を行ったところ、各クラスタ間に有意な人数の偏りは

Table 3 下位尺度間相関係数

	他者追随	社会的安定希求
社会的安定希求	.43***	
自己充足志向	.09	.34***

*** $p<.001$

見られなかった ($\chi^2=3.02$, $df=2$, $n.s.$)。また、性別によるクラス間の人数の偏りも見られなかった ($\chi^2=.20$, $df=2$, $n.s.$)。Figure 1 は、3 クラス分類における、“やりたいこと探し”の動機尺度の3下位尺度標準得点のクラスパターンを示したものである。

各クラスの特徴は、以下の通りである。

第1クラス：自己決定的な「自己充足志向」が相対的に最も高く、次いで自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、非自己決定的な「他者追随」という順に低くなる群（自己決定的動機群）。

第2クラス：非自己決定的な「他者追随」が相対的に最も高く、次いで自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、自己決定的な「自己充足志向」という順に低くなる群（非自己決定的動機群）。

第3クラス：「自己充足志向」「社会的安定希求」が相対的に最も低く、「他者追随」は前二者ほどではないものの、標準よりは低い群（低動機づけ群）。

自己決定理論によれば、動機づけは、自己決定性の程度により一次元上に連続体として並べることができる（Hayamizu, 1997；永作・新井, 2003；Ryan & Connell, 1989）が、これら3つのクラスは上記の理論的背景をよく反映していると考えられ、また、永作・新井（2005）に見られた自律的・高進学動機尺度のクラスパターンとも一致する結果であると考えられる。

②各群における“やりたいこと”の有無 次に、“やりたいこと探し”の動機のクラスパターン（自己決定的動機群、非自己決定的動機群、低動機づけ群）別に「やりたいことの有無」を比較したところ（Table 4）、有意な人数比率の偏りが見られた ($\chi^2=44.33$, $df=2$, $p<.001$)。そこで残差分析を行ったところ、自己決定的動機群では“やりたいこと”が「見つかっている」⁴人が「見つからない」人よりも多く、非自己決定的動機群では、“やりたいこと”が「見つからない」人が「見つかる

いる」人よりも多かった。低動機づけ群においては「やりたいことの有無」の人数に差は見られなかった（Table 5）。

③各群における進路不決断の差 次に、“やりたいこと探し”の動機のパターンと進路不決断との関係を検討するため、“やりたいこと探し”の動機のクラスパターン（自己決定的動機群、非自己決定的動機群、低動機づけ群）を独立変数とし、進路不決断尺度の「職業決定不安」「職業選択葛藤」「職業外的統制」「職業モラトリアム」に従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、全ての分析において有意な群間差が見られた（順に $F(2, 340)=41.21$, $p<.001$ ； $F(2, 340)=20.31$, $p<.001$ ； $F(2, 340)=11.53$, $p<.001$ ； $F(2, 340)=16.20$, $p<.001$) ため、Tukey の HSD 法による多重比較（5%水準）を行った。その結果を Table 6 に示す。

「職業決定不安」における結果を見ると、非自己決定的動機群の得点が自己決定的動機群と低動機づけ群よ

Table 4 “やりたいこと探し”の動機パターンと“やりたいこと”の有無のクロス集計表

クラスパターン	n	“やりたいこと”が	
		見つかっている	見つからない
自己決定的動機群	127	73 (57.48)	54 (42.52)
非自己決定的動機群	118	20 (16.95)	98 (83.05)
低動機づけ群	101	48 (47.52)	53 (52.48)
合計	346	141 (40.75)	205 (59.25)

^{a)} 括弧内は行和の% $\chi^2=44.33$, $df=2$, $p<.001$

Table 5 Table 4の調整済み残差

クラスパターン	“やりたいこと”が	
	見つかっている	見つからない
自己決定的動機群	4.82**	-4.82**
非自己決定的動機群	-6.48**	6.48**
低動機づけ群	1.65	-1.65

** $p<.01$

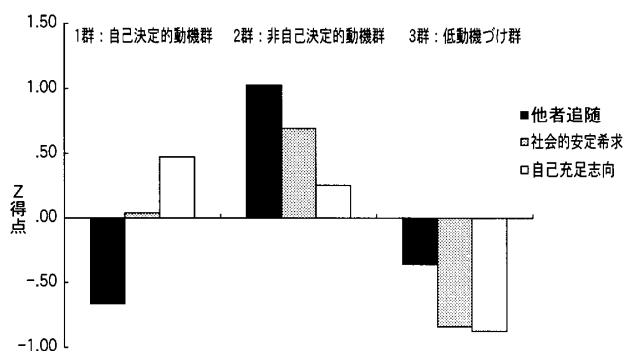


Figure 1 “やりたいこと探し”の動機尺度のクラスパターン

⁴ 本研究の調査では、やりたいことが「見つかっている」と回答しながら「やりたいことを探している」と回答した対象者が399名中108名存在した。質問の当初の意図からすると矛盾した回答であるが、この回答は「自分のやりたいことが完全に確信した」というよりは、むしろ、「自分が今、将来やりたいと思っていることはあるが、それは確信に至るほどではない暫定的なもので、今後変わるかも知れない」という意味を含んだ回答であると考えられる。本研究では、暫定的でも意思決定できている者は、「決定している」者、すなわち、「やりたいことが見つかっている」者として取り扱う。したがって、本研究ではこれらの者も分析対象として扱うこととした。

Table 6 “やりたいこと探し”の動機のパターンによる進路不決断尺度の各下位尺度の差の検討

進路不決断尺度の下位尺度	クラスパターン	M	SD	F値	多重比較
職業決定不安尺度	自己決定的動機群	17.28	4.72	41.21***	自己決定, 低動機<非自己決定
	非自己決定的動機群	21.49	3.35		
	低動機づけ群	16.45	5.24		
職業選択葛藤尺度	自己決定的動機群	13.29	4.73	20.31***	自己決定, 低動機<非自己決定
	非自己決定的動機群	15.73	4.30		
	低動機づけ群	11.91	4.42		
職業外的統制尺度	自己決定的動機群	13.04	3.54	11.53***	自己決定, 低動機<非自己決定
	非自己決定的動機群	15.21	3.50		
	低動機づけ群	13.89	3.59		
職業モラトリアム尺度	自己決定的動機群	9.01	3.84	16.20***	自己決定<非自己決定, 低動機
	非自己決定的動機群	11.94	4.21		
	低動機づけ群	11.40	4.80		

a) 表中の記号<は $p<.05$ を表す。*** $p<.001$ b) 各クラスパターンの n は以下の通り:自己決定的動機群 $n=126$, 非自己決定的動機群 $n=117$, 低動機づけ群 $n=100$

りも有意に高く、自己決定的動機群と低動機づけ群の間には統計的に有意な差が見られなかった。「職業選択葛藤」と「職業外的統制」においても同様の結果であった。「職業モラトリアム」においては、非自己決定的動機群と低動機づけ群の得点が自己決定的動機群よりも有意に高く、非自己決定的動機群と低動機づけ群の間には統計的に有意な差が見られなかった。したがって、自己決定的動機群は「職業決定不安」「職業選択葛藤」「職業外的統制」「職業モラトリアム」のいずれも非自己決定的動機群よりも低いこと、低動機づけ群は「職業決定不安」「職業選択葛藤」「職業外的統制」は非自己決定的動機群より低いものの「職業モラトリアム」は自己決定的動機群より高いこと、そして、非自己決定的動機群においては4側面のいずれも、自己決定的動機群、低動機づけ群よりも高いことが明らかになった。

以上、①から③の結果を総合すると、非自己決定的動機群で進路決断への困難が相対的に最も大きく、実際、この群に該当する対象者の80%以上が「やりたいことが見つからない」と回答していることが明らかになった。このことは、非自己決定的な“やりたいこと探し”の動機が優勢な状態で職業につながる“やりたいこと探し”を行っても、将来の職業につながる“やりたいこと”を見つけ出せなかったり、複数ある選択肢の中から一つを決断することができなくなったりする可能性を示唆するものと考えられる。

一方、自己決定的動機群は進路決断への困難が相対的に最も小さく、“やりたいこと”が「見つまっている」人が「見つからない」人よりも多かったことから、

自己決定的な“やりたいこと探し”の動機が優勢な状態で職業につながる“やりたいこと探し”を行うことが最も適応的であることが示唆された。これは、より自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連があるという自己決定理論に合致する結果と考えられる。

なお、いずれの動機も低い低動機づけ群においては、進路決断への困難は比較的小さく、「やりたいことの有無」においても有意な人数比率の偏りは見られなかった。しかし、「職業モラトリアム」の得点が相対的に高かったことを考えると、この結果は適応的なものであるとは考え難い。進路不決断尺度の「職業決定不安」「職業選択葛藤」「職業外的統制」における得点の相対的な低さは、裏を返せば職業決定に関する取り組みを十分行っていない、あるいは、行う意思がないことのあらわれとも解釈することができ、「職業モラトリアム」における得点の高さは、この可能性を示唆するものと考えられるためである。

安達(2004)は学生のキャリア意識として上述の“やりたいこと”志向のほか、キャリア選択を自分の切実な問題として捉えられない状態である「受身」を取り上げている。本研究の結果を総合して考えると、同じ“やりたいこと”志向を有していたとしても、実際の“やりたいこと探し”で非自己決定的な動機が優勢であったり、全般的に動機が低い場合は、就職活動への移行困難(大久保, 2002)や、職業の社会的意義・公共性の軽視(下村, 2003)といった“やりたいこと”志向の不適応的な側面が顕在化するのではないかと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、大学生に広く認知され、また、職業選択と関わりがあると考えられる“やりたいこと探し”の動機を明らかにし、その動機の個人差と進路不決断との関連を心理学的に検討することであった。そして、このような目的に沿って、大学生がどれだけ自己決定的な動機で“やりたいこと探し”をしているかを測定する尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行った。また、作成された“やりたいこと探し”の動機尺度を用いて、“やりたいこと探し”の動機の個人差と、進路不決断との関連を検討した。

その結果、“やりたいこと探し”の動機は、非自己決定的な「他者追随」、自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、自己決定的な「自己充足志向」という3つの側面から構成されることが明らかとなった。また、“やりたいこと探し”の動機の個人差を検討したところ、自己決定的動機群、非自己決定的動機群、低動機づけ群の3つのパターンがあることが明らかにされた。さらに、進路不決断の側面で最も適応的なのが自己決定的動機群であること、非自己決定的動機群と低動機づけ群は、進路不決断の面で問題を抱えていることが示唆された。

“やりたいこと探し”の動機尺度において、自己決定性の高くない動機が構成因子として抽出されたことから、職業選択に悩む大学生の中には、“やりたいこと探し”に関して社会から外的統制を感じている者がいることが示唆された。このことは、好きなことや自分のやりたいことを仕事に結びつける傾向として、“やりたいこと”志向が現代の大学生に広く支持されているとしても、その志向を自分の志向として受け入れる時の自己決定のレベルは個人によって異なり、その個人差が進路選択上の意思決定に影響を及ぼすことを示唆するものであると考えられる。本研究の結果は、適応・不適応双方の知見が散見される“やりたいこと”志向と職業選択との関連についての知見を統合し、現在の大学生における職業選択やキャリア意識形成の変化への理解を深める上で、新たな視点を提供する可能性を持つと考えられる。

ただし、本研究において、自己決定性の高くない「他者追随」動機の下位尺度を構成する項目が4項目にとどまったこと、ならびに、尺度作成の段階で想定していた4つの調整スタイルを完全には反映しなかったことには留意する必要がある。就職活動は、自らの志向・価値観といった内的要因ばかりでなく、家族や経済的

要因などの外的要因によっても規定される面が多い活動であり、そのため、動機の自己決定性に一定の曖昧さが残存した可能性が考えられる。

また、“やりたいこと探し”の動機のうち、非自己決定的な動機である「他者追随」が相対的に高い非自己決定的動機群は、進路不決断の面で問題を抱えている可能性があることが示唆された。この群に属する調査対象者の80%超は“やりたいこと”が見つかっておらず、また、職業選択における不安や葛藤、外的な統制感、モラトリアム的な感覚も強かったことを考えると、この群における職業選択上の意思決定の困難さは他の2群に比して強いと思われる。ただし、本研究では、職業選択に関して決めていないことに対して当人がどれだけ納得しているかという“快適さ”の視点(若松, 2005)は取り込まれていない。Gordon(1998)によれば、職業決定の研究において共通して重要性を指摘できる変数は、上述の“快適さ”と強い不安および問題領域を問わない“優柔不断さ”を中核的な特性とする“indecisiveness”だけであるとしている(若松, 2005)。したがって進路不決断の観点から、これらの視点を取り入れた検討を行っていくことが今後の課題であると考えられる。

最後に、本研究の限界として、調査対象となった大学数が少なく、各大学のサンプルの大きさ、性別や学年、専攻学部・学科、進路状況などの点において、十分にバランスの取れたサンプリングを行えたとは言い難いことが挙げられる。変数間の関係において大きな傾向差はないと判断されたものの、“やりたいこと探し”の動機尺度における「社会的安定希求」「他者追随」の2つの下位尺度得点に関しては、学校間で有意な差が認められた。この結果は、“やりたいこと探し”の動機、就職活動のいずれにおいても大学や専攻する学部・学科の違いが影響する可能性を示唆していると考えられる。安達(2001a)が指摘するように、大学やそこでの専攻といった教育的背景は、個人変数の一つとしてキャリア発達過程に対し直接的にも間接的にも影響を及ぼすと考えられる。本研究では、こうした個人変数が“やりたいこと探し”の動機尺度得点にもたらす影響までは明らかにすることができなかった。したがって、今回の結果を一般化することには一定の制約がある。今後、調査を重ねることにより、大学や専攻学部・学科による差、ならびに、性差や学年差等といった個人変数による影響の検証を行い、本研究における結果の一般化可能性を高めていくこと、また、より適切なサンプリングを行うことによって本尺度の改善・

修正を図ることが課題であると考えられる。

引用文献

- 安達智子 (1998). 大学生の就業動機測定を試み
実験社会心理学研究, **38**, 172-182. (Adachi, T.
(1998). An attempt to measure vocational
motivation among undergraduate students.
*Japanese Journal of Experimental Social Psy-
chology*, **38**, 172-182.)
- 安達智子 (2001a). 大学生の進路発達過程—社会・
認知的進路理論からの検討— 教育心理学研究,
49, 326-336. (Adachi, T. (2001a). Career
development by university students : Social
cognitive career study. *Japanese Journal of
Educational Psychology*, **49**, 326-336.)
- 安達智子 (2001b). 進路選択に対する効力感と就業
動機, 職業未決定の関連について—女子短大生を
対象とした検討— 心理学研究, **72**, 10-18.
(Adachi, T. (2001b). An examination of the
relationship among career decision-making
self-efficacy, vocational motives, and
motivational indecision : A study of women's
junior college students. *Japanese Journal of
Psychology*, **72**, 10-18.)
- 安達智子 (2004). 大学生のキャリア選択—その心
理的背景と支援— 日本労働研究雑誌, **533**, 27-37.
(Adachi, T. (2004). Career decision of
Japanese university students : Psychological
determinants and intervention. *Japanese Jour-
nal of Labour Studies*, **533**, 27-37.)
- Blustein, D. L. (1988). The relationship between
motivational processes and career exploration.
Journal of Vocational Behavior, **32**, 345-357.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985a). *Intrinsic
motivation and self-determination in human
behavior*. New York : Plenum.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985b). The general
causality orientations scale : Self-determina-
tion in personality. *Journal of Research in
Personality*, **19**, 109-134.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1991). A motivational
approach to self : Integration in personality.
In R. A. Dienstbier (Ed.), *Nebraska symposium
on motivation*. Vol. 38. *Perspectives on motiva-
tion* (pp.237-288). Lincoln, NE : University of
Nebraska Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.) (2002). *Hand-
book of self-determination research*. Roches-
ter, NY : University of Rochester Press.
- 藤原善美 (2005). 大学生のライフコース展望にお
ける自律性尺度の開発—自己決定理論に基づいて
— 進路指導研究, **23**, 11-18. (Fujiwara, Y.
(2005). The development of autonomy meas-
urement scale on life course perspective of
university students : Self-determination theory
approach. *Bulletin of the Japanese Society for
Study of Career Guidance*, **23**, 11-18.)
- Gordon, V. N. (1998). Career decidedness types :
A literature review. *Career Development
Quarterly*, **46**, 386-403.
- 速水敏彦 (1995). 外発と内発の間に位置する達成
動機づけ— 心理学評論, **38**, 171-193. (Haya-
mizu, T. (1995). Achievement motivation
located between extrinsic and intrinsic motiva-
tion. *Japanese Psychological Review*, **38**, 171-
193.)
- Hayamizu, T. (1997). Between intrinsic and
extrinsic motivation : Examination of reasons
for academic study based on the theory of inter-
nalization. *Japanese Psychological Research*, **39**,
98-108.
- Igreja, I., Zuroff, D. C., Koestner, R., & Saltaris, C.
(2000). Applying self-determination theory to
the prediction of distress and well-being in gay
men with HIV and AIDS. *Journal of Applied
Social Psychology*, **30**, 686-706.
- 乾 彰夫 (2001). 高卒無業者・フリーターの発生要
因と社会的性格—近年の諸調査の批判的検討を通
して— <教育と社会>研究, **11**, 1-10. (Inui,
A.)
- Kasser, V. G., & Ryan, R. M. (1999). The relation
of psychological needs for autonomy and
relatedness to vitality, well-being, and mortal-
ity in a nursing home. *Journal of Applied
Social Psychology*, **29**, 935-954.
- 小杉礼子 (編) (2002). 自由の代償／フリーター
—現代若者の就業意識と行動— 労働政策研究・
研修機構
- 小杉礼子 (2004). 若年無業者増加の実態と背景
—学校から職業生活への移行の隘路としての無業

- の検討 日本労働研究雑誌, **533**, 4-16. (Kosugi, R. (2004). The increase and background of the jobless youth : An examination of the jobless youth in the transition from school to working life. *The Japanese Journal of Labour Studies*, **533**, 27-37.)
- 久木元真吾 (2003). “やりたいこと”という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結— ソシオロジ, **48**, 73-89. (Kukimoto, S. (2003). “Doing what I want to do” : Narratives of “freeters” and their unintended consequences. *Soshioroji*, **48**, 73-89.)
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 松尾雄毅・佐野秀樹 (1993). 職業未決定の類型と処遇—アメリカと日本における研究の概観—東京学芸大学紀要第一部門, **44**, 273-286. (Matuo, Y., & Sano, H. (1993). The subtypes of vocational indecision and treatment approaches : A summary of studies in the United States and Japan. *Bulletin of Tokyo Gakugei University*, **44**, 273-286.)
- 永作 稔・新井邦二郎 (2003). 自律的高校進学動機尺度作成の試み 筑波大学心理学研究, **26**, 175-182. (Nagasaki, M., & Arai, K. (2003). Constructing a scale for autonomic motivation to enter high school. *Tsukuba Psychological Research*, **26**, 175-182.)
- 永作 稔・新井邦二郎 (2005). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討, 教育心理学研究, **53**, 516-528. (Nagasaki, M., & Arai, K. (2005). Autonomous motivation to enter high school and school adjustment : A short-term longitudinal study. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 516-528.)
- 内閣府 (編) (2003). 平成 15 年版国民生活白書 デフレと生活—若年フリーターの現在— ぎょうせい
- 日本労働研究機構 (2000). フリーターの意識と実態—97 人のヒアリング結果より— JIL 調査報告書 No.136
- 大久保幸夫 (2002). 新卒無業。なぜ、彼らは就職しないのか 東洋経済
- 奥井秀樹・大里大助 (2004). 若年労働者の職業的進路不決断の測定 進路指導研究, **22**, 19-24.
- (Okui, H., & Ohsato, D. (2004). The measurement of the young workers' vocational career indecision. *Bulletin of the Japanese Society for Study of Career Guidance*, **22**, 19-24.)
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- Ryan, R. M., Plant, R. W., & O'Malley, S. (1995). Initial motivations for alcohol treatment : Relations with patient characteristics, treatment involvement and dropout. *Addictive Behaviors*, **20**, 279-297.
- Ryan, R. M., Rigby, S., & King, K. (1993). Two types of religious internalization and their relations to religious orientations and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 586-596.
- 桜井茂男 (1993). 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, **29**(別冊), 203-208. (Sakurai, S.)
- 桜井茂男 (1995). 「無気力」の教育社会心理学—無気力が発生するメカニズムを探る— 風間書房
- Sheldon, K. M., & Kasser, T. (1995). Coherence and congruence : Two aspects of personality integration. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 531-543.
- 清水和秋 (1990). 進路不決断尺度の構成—中学生について— 関西大学社会学部紀要, **22**, 63-81. (Shimizu, K. (1990). The construction of the factorial scales of career indecision dimensions for junior high school students. *Bulletin of the Faculty of Sociology : Kansai University*, **22**, 63-81.)
- 下村英雄 (2003). 調査研究から見たフリーター—フリーターの働き方と職業意識— 現代のエスプリ, **427**, 32-44. (Shimomura, H.)
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30. (Shimoyama, H. (1986). A study on the vocational indecision of undergraduates. *Japanese Journal of Educa-*

tional Psychology, **34**, 20-30.)

浦上昌則 (1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連. 教育心理学研究, **41**, 358-364. (Urakami, M. (1993). Career decision-making self efficacy and career maturity. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 358-364.)

浦上昌則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, **42**, 115-126. (Urakami, M. (1995). The study of college students' self efficacy regarding career decision making. *Bulletin of the School of Education : The Department of Educational Psychology*, **42**, 115-126.)

浦上昌則 (1996). 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に関する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から— 教育心理学研究, **44**, 195-203. (Urakami, M. (1996). Career exploration process in women's junior college students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 195-203.)

Vansteenkiste, M., Lens, W., Witte, S.D., Witte, H. D., & Deci, E. L. (2004). The “why” and “why not” of job search behaviour : Their relation to searching, unemployment experience, and well-being. *European Journal of Social Psychology*, **34**, 345-363.

若松養亮 (2001). 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて—教員養成学部 of 学生を対象に— 教育心理学研究, **49**, 209-218. (Wakamatsu, Y.

(2001). Difficulties in making career decisions: College students majoring in education. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 209-218.)

若松養亮 (2005). 教員養成学部の進路未決定者が有する困難さの特質—類型化と教職志望による差異の分析を通して— 青年心理学研究, **17**, 43-56. (Wakamatsu, Y. (2005). The nature of difficulties which bother undecided students of Faculty of Education : Subtypes and differences about aspiration of teaching profession. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **17**, 43-56.)

Williams, G. C., Grow, V. M., Freedman, Z. R., Ryan, R. M., & Deci, E. L. (1996). Motivational predictors of weight loss and weight-loss maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 115-126.

Yamauchi, H., & Tanaka, K. (1998). Relations of autonomy, self-referenced beliefs, and self-regulated learning among Japanese children. *Psychological Reports*, **82**, 803-816.

謝 辞

本論文の作成にあたり, 松井 豊先生 (筑波大学), 外山美樹先生 (鹿屋体育大学) から貴重なご指導・ご助言を頂きました。心より御礼申し上げます。また, 調査にご協力頂きました大学の先生方, 学生の皆さんに厚く感謝申し上げます。

(2006.5.12 受稿, '07.7.21 受理)

Self-Determination Level of the Motivation for “Searching for Something to Commit to” : Effect on Career Indecision

TOSHIHIKO HAGIWARA (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA) AND SHIGEO SAKURAI
(INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 1–13

The purposes of the present study were to investigate the motivation for “searching for something to commit to” within career choices, and to examine the link between the self-determination level of such motivation and career indecision. Base on self-determination theory (Ryan & Deci, 2000), a scale to measure motivation for “searching for something to commit to” within career choices was constructed, and its reliability and validity were examined. A survey was administered to 399 university students. Factor analysis identified 3 factors or subscales : “self-fulfillment orientation”, “social position orientation”, and “following others”. These factors differed as to the level of self-determination. The reliability and validity of the scale were confirmed. Using cluster analysis and ANOVA, the relation between self-determination level as measured by the scale and career indecision was examined. The results indicated that the absence of self-determined motivation to “search for something to commit to” could lead to career indecision. It was suggested that a sense of self-determination in “searching for something to commit to” could be linked to adaptation for career choices.

Key Words : “searching for something to commit to”, career indecision, self-determination theory, career choice, university students